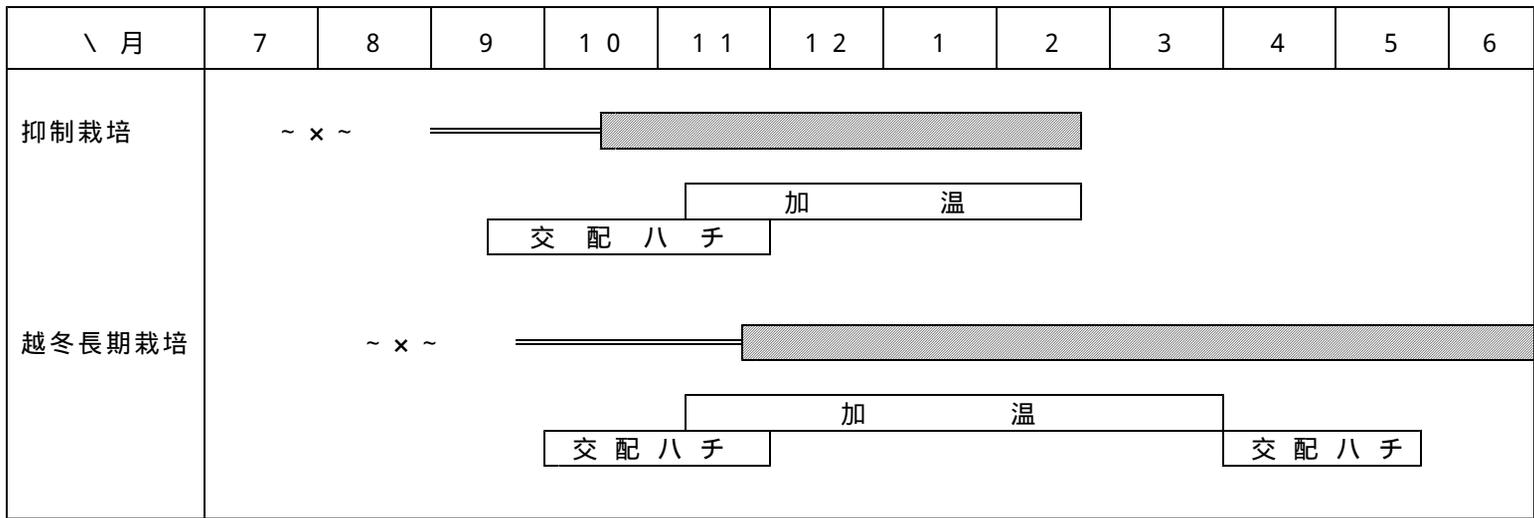
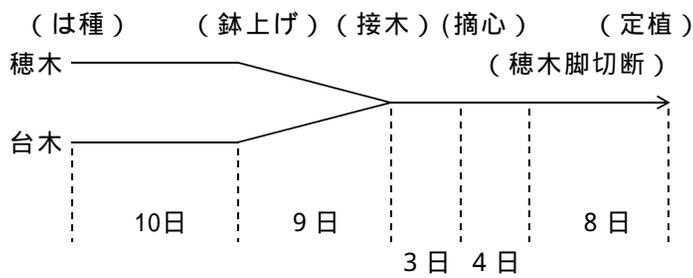


# 抑制、越冬長期穫り ミニトマト



(凡例) : 播種 ~ x ~ : 育苗 x : 接木 : 定植 ===== 本ば管理 ■ : 収穫

- 品種例** 穂木：ミニキャロル、ココ  
 台木：アンカーT、新メイト
- 目標収量** 抑制栽培 5,000 kg / 1,000㎡  
 抑制越冬長期栽培 8,000 kg / 1,000㎡
- 栽培のポイント**  
 抑制越冬長期栽培では収穫期間が長いので、樹勢の維持に努める。  
 低温寡日照期には、果実の成熟と着色促進のため、果房に日射があたるよう誘引を行う。  
 2本仕立てのため、側枝を利用し樹勢のバランスを保つ。
- 技術内容**  
 (1) 育苗 (数量は栽培面積1,000㎡当たり)



**用土の準備**  
 購入用土 100 リットル (播種床用)  
 速成床土 1,500 リットル

速成床土作成例	資材	量
	田土	750 リットル
	砂	300 リットル
	ピ - トモス	450 リットル
	苦土石灰	1.5 kg
	過磷酸石灰	3 kg
	細粒 8 6 8	2 kg

苦土石灰は臭化メチルで消毒・ガス抜き後に施用し、pH 5.5 ~ 6.5、EC 0.5に調整する。

**は種**  
 育苗箱は穂木用 9 枚、台木用 10 枚を用意し、市販育苗培土を 1 箱あたり 6 リットル詰める。

コート種子を穂木 1,100 粒、台木 1,200 粒用意し、は種機を利用して 128 粒 / 箱、点播する。

発芽が揃うまでは、新聞紙で覆い、ハウス内に遮光カーテン (遮光率 60% 程度) を設置する。培土の乾燥を防ぐため、発芽まで 2 回 ~ 3 回新聞紙が湿る程度灌水する。

**鉢上げ**  
 12cm 径ポリポットを 1,000 鉢用意する。鉢上げ時期は、は種後約 10 日である。ポットの中央に台木を、その脇に穂木を鉢上げする。

**接木 (呼び接ぎ)**  
 台木と穂木の茎の太さをそろえるため、育苗箱での水分等、穂木と台木に管理を同じくする。

子葉と本葉第 1 葉との間で接木を行う。穂木、台木とも 45 度の角度で、穂木は切り上げ、台木は切り下げる。

接木適期は、本葉 3 枚展開時である。遅れると側枝の伸長が遅れる原因となる。

2本仕立てにするため、3節で摘芯し、生育の揃った側枝 2 本を残す。側枝のバランスを保つため、摘心は早めに行う (接木後約 3 日)。

**穂木脚の切断**  
 接木後約 7 日に行う。穂木脚の切断と同時に台木の本葉を除去する。

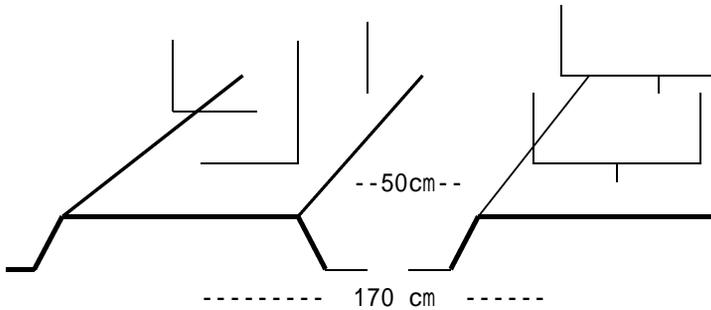
(2) 本ば準備

前作終了後、太陽熱消毒を施すのが望ましい。

施肥例 (kg / 1,000m<sup>2</sup>)

肥料名	成分	基肥	追肥
熟成堆肥		2,000	
苦土消石灰		120	
有機1号など	7-5-5	120	
液肥	6-8-8		200

畝立て



低温期の地温確保のため、マルチングにはグリーンマルチを用いる。

(3) 定植

適期は側枝の本葉7枚時である。定植前にポットに十分かん水し、涼しい時間帯に定植作業を行う。やゝ浅植えとする。株間50cm、栽植密度900株/1,000m<sup>2</sup>。

(4) 灌水

定植後、鉢土が乾いた段階で手灌水を行う(1株当たり約0.5リットル)。深根にするため、以降は灌水を控える。

第5段花房開花時期から、チューブ灌水を行う。

(5) 誘引

テープ誘引を行い、伸ばした2本の側枝を左右に振り分ける。第5花房開花時ごろから斜め誘引を行う。2度目のつるおろし時(7段花房開花時)に、テープの先にカラー番線のフックをつけた誘引具等で横に吊る。

樹勢の維持のために、生長点を上に向ける。

(6) 整枝

わき芽は早い目にかき取る。作業は晴れた日に行う。

(7) 着果促進(ホルモン処理、交配バチ)

高温期及び低温期は、蜂の活動が劣るためホルモン処理を行う。トマトーン(高温期200倍、低温期100倍)またはトマトラン(高温期1,000倍、低温期500倍)。

ホルモン処理の回数は、1花房当たり3回以内とする。

9月中旬から11月末まではマルハナバチを用いる。

寡日照低温期の炭酸ガス施用は、着果数確保に有効な技術である。

(8) 摘葉

斜め誘引開始時から老化葉を随時摘除する。本葉の最低必要枚数は15枚である。

(9) 追肥

第5花房開花期から、月1回程度、液肥で追肥を行う(チッソ成分で2kg/1,000m<sup>2</sup>・1回)。

(10) 摘果

1果房当たりの着果数は50果までに着果制限する。

(11) 温度管理

高温による果房の乱れを防ぐため、施設内温度は35以下に管理する。

低温期の夜温は12に設定し、樹勢の維持を図る。

(12) 摘心

25段が目安。摘心時期は収穫終了から逆算し、60日前に行う。

(13) 病虫害防除、生理障害

青枯病

抵抗性台木(アンカーT等)を利用する。

葉かび病・灰色かび病

湿度上昇に伴い発病する。収穫済み果房より下位の葉が混み合っている場合には、速やかに摘葉する。

通路の敷きワラマルチは施設内の湿度を下げるのに有効である。

疫病

比較的低温で多湿な条件で発生しやすい。発生を見たら薬剤散布とともに換気に努め、発病葉をちぎり取り、施設外に持ち出す。

オンシツコナジラミ、タバココナジラミ

黄色粘着板(ホリパー等)の設置は発生の初期には有効である(100枚/1,000m<sup>2</sup>)。また、コナジラミ類の発生を確認したら速やかに薬剤防除に努める。

マメハモグリバエ

育苗時からの寄生を防ぐため、育苗ハウスの側面を寒冷紗で被覆し、進入を抑える。

トマトサビダニ

ハウス周辺の除草を徹底する。発病株やハウス内の残渣は、焼却するか埋没処分する。

裂果

低温期の夜間湿度の上昇が原因となる。早朝加温により湿度をさげるのは有効な防止策である。

(住谷 一樹、池田 正彦)